

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	園田 浩司
論文題目	カメルーン狩猟採集民バカの子どもにおける社会的相互行為		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、カメルーン共和国東部州の熱帯雨林に暮らす狩猟採集民バカの子どもたちをめぐる社会的相互行為の特徴を、生業活動場面における会話の分析を通じて明らかにしたものである。</p> <p>第1章ではまず、狩猟採集民の子ども研究に対する本論の立場が明らかにされる。これまで、狩猟採集民において大人が子どもたちを放任しており、子供たちは自律的に活動しているという報告が多くなされてきた。それに対し本論では、子どもの生業活動への参加において展開される対面相互行為を分析することによって、「放任」や「自律」といった言葉では表現しきれない、大人や他の子どもたちとの緩やかな関係を築くための相互行為技術を明らかにしていくという方針が示される。次いで、調査地と、調査対象であるバカの概要が記述される。</p> <p>第2章においては、バカのライフステージの分類と「子ども期」の確定、子どもの活動の詳細、居住地の生態環境といった民族誌的記述がおこなわれる。</p> <p>第3章では、大人と子どもが共同で取り組むオニネズミ猟や、食用昆虫採集の場面が分析される。それらの活動の中で、子どもはしばしば大人の指示より先にさまざまな行為を開始しているが、大人はその行為を禁止したりねじ曲げたりするのではなく、うまく受け、その方向性をたくみに引き出そうとしていた。そこではしばしば「私のようにやりなさい」という教育的な指示ではなく、「私も一緒にやります」という、子どもの行為に乗り込む態度が見られた。このことは、他文化に見られるさまざまな子どもに対する態度とは異質な、バカにおける際だった特徴だと言える。</p> <p>第4章では、もうひとつの大人と子どもの協働作業である、獲物の解体の手伝いに焦点が当てられる。ある場面においては、「獲物のダイカーが断末魔で『ムフー』と鳴いた」という子どもの語りに大人が素直に驚き、その言葉を繰り返すというやりとりが見られた。また別の場面では、子どもによる肉の取り分の要求が観察された。これは身勝手な子どもの振る舞いかと思われたが、実はそれは、会話の参与役割を獲得しようという相互行為上の戦略なのだと分析された。ここでも大人たちは、そういった、ある意味で生意気な子どもの行為をとがめるでもなく、穏やかに追認していた。子どもは大人を相手に、さらには大人を「資源」として、子ども独自の文化的活動を構築しているが、こういった子どもの文化実践は、大人との緩やかな関係のなかでこそ達成されるものであると考えられた。</p> <p>第5章では、子どもたちだけでおこなわれたオニネズミの集団猟における会話が分析されている。そこでは、会話分析において基本とされる「質問」－「応答」といった発話のペア (隣接対) や、それによって達成される意見調整はほとんどおこなわれず、応答を期待しない言い放ち、他者の発話へのあいのみ、「うん」「わかった」などといった同意表現の不</p>			

在、といった現象が見られた。すなわちここでは、「話し手」「聞き手」「傍参与者」といった、社会学者ゴフマンの言う「参与枠組 participation framework」が確定しがたかったのである。これは、獲物の動きや状況の変化など、常に周囲に注意を払っておかねばならない集団猟によって作り出された構えであると分析されている。

以上の分析を通して第6章の総合考察では、バカに見られた相互行為的な特徴が、何に原因するのかが考察される。狩猟採集・遊動生活という彼らの生き方は反映していると考えられるが、そこには社会学的条件と生態学的条件が存在する。前者においては、つねに変転する社会関係の中で、相手との綿密な意見調整はむしろ障害であり、「相手の行為を受ける」という態度の方が都合がいいと分析されている。また後者においては、迅速に森の対象物に注意を向ける必要が、相手との「やり取り」ではなく、言い放ち、あいのり、といった発話形式の優位性を生んでいるのだと分析されている。このような環境のもとで、バカの子どもたちは、大人たちにゆるやかに承認されつつ行為しているのだと結論される。